HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	セネガル農村の住民組織によるマイクロクレジット活動 : ワジュール郡の事例分析
Author(s)	池見, 真由
Citation	經濟學研究, 62(3), 139-152
Issue Date	2013-02-21
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52291
Type	bulletin (article)
File Information	ES_62(3)_139.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 62-3
北海道大学 2013. 2

セネガル農村の住民組織によるマイクロクレジット活動
――ワジュール郡の事例分析――

池見　真由

はじめに

筆者は，これまでサブサハラ・アフリカ[1]（以下アフリカ）農村における参加型開発研究の一環として，セネガルの農村地域をフィールドに，地域で様々な開発実践に取り組む住民組織について断続的に調査を実施してきた。本研究における参加型開発とは，「地域の環境や文化，人びとの慣習や知識・知恵を実践に取り入れながら，住民主体による生活改善や意識向上，組織力強化などのエンパワメント，つまり住民にこれらの力をつけることを目指した開発」と定義しておく（Chambers, 1983, 1997; Hickey and Mohan, 2004; 真崎 , 2010; 佐藤 , 2003 等を参照）。また，筆者が分析対象とする住民組織の具体的な取り組みとしては，参加型開発の一手段またはプロジェクトそのものとして盛んに採用され，住民の所得向上などの経済的効果を上げているマイクロクレジット活動に焦点を当ててきた。マイクロクレジットとは周知の通り，低所得者向けの無担保による少額融資を指し，これによって低所得者自身による収入創出の機会や自立した経済活動を始める機会を提供するという目的がある（Rahman, 1999; Yunus, 1999）。さらに，その資金を生産的な活動に投資し，利益を上げ，余剰をさらに投資に回すというサイクルを定着させ，現金収入を持続的に向上させることも目標としている（坂井 , 2005）[2]。

マイクロクレジットは，上述した所得向上等の経済的効果の他，女性のエンパワメント等の社会的効果があることでも注目されている。女性のエンパワメントに関しては，これまで省みられなかった女性に焦点をあて，「参加」を通じて様々な力をつけることを目標とし，「ボトム－アップ」式の発展を目指すものであるとされる（浅野 , 2008: 18）。鷹木によると，経済のグローバル化が進むなかで，アフリカ諸国[3]では特に構造調整政策の過程で貧困の女性化が一層進んだ。このことを考慮するならば，開発，特に貧困削減政策においては，女性を対象とした政策がより重視されるべきであり，その意味では女性をターゲットとするマイクロクレジット・プログラムは一つの有効な手段になり得るとされる（鷹木 , 2005: 95）。

さらにマイクロクレジットは，貧困層の潜在

1）サブサハラ・アフリカ（Sub-Saharan Africa）は，全アフリカ 53 か国中，北部の地中海沿岸 5 か国（エジプト，リビア，チュニジア，アルジェリア，モロッコ）を除くサハラ砂漠以南の 48 か国を指す。以前は，黒人が多く居住する地域という意味でブラックアフリカとも呼ばれていたが，差別的表現として現在はこれに代わる用語としてサブサハラが一般的に用いられている。ちなみに，2011 年 7 月 9 日新たに南スーダン共和国という 54 か国目のアフリカ国家が誕生した。

2）融資のみならず貯蓄や保険なども含めた小口金融システム全般を指して「マイクロファイナンス」という語も一般的に用いられている（Armendáriz and Morduch, 2005; 岡本・粟野・吉田 , 1999; 鷹木 , 2007: 4）。

3）ここではマグリブ三国（チュニジア，アルジェリア，モロッコ）などの北部も含まれる。

能力を引き出し経済活動や社会・政治活動への参加を促す点で，参加型開発モデルの一つとして語られることが多い。例えばグループ貸付制度やリーダーの活用等は，融資プログラムの運営を貧困層自身が行うため，貧困層を巻き込んだ開発手法として，また，グループ運営能力や発言力の向上等のエンパワメントを促す手段として評価されている(粟野 , 2002: 113)。特にグループ貸付制度に関しては，アフリカの農村金融において社会のインフォーマルな機能を活用し，グループのメンバーたち自身による連帯責任や相互監視によって，担保や高コストの問題を解消できる取り組みであるとして，実践に盛んに取り入れられている(粟野 , 2000: 33)。

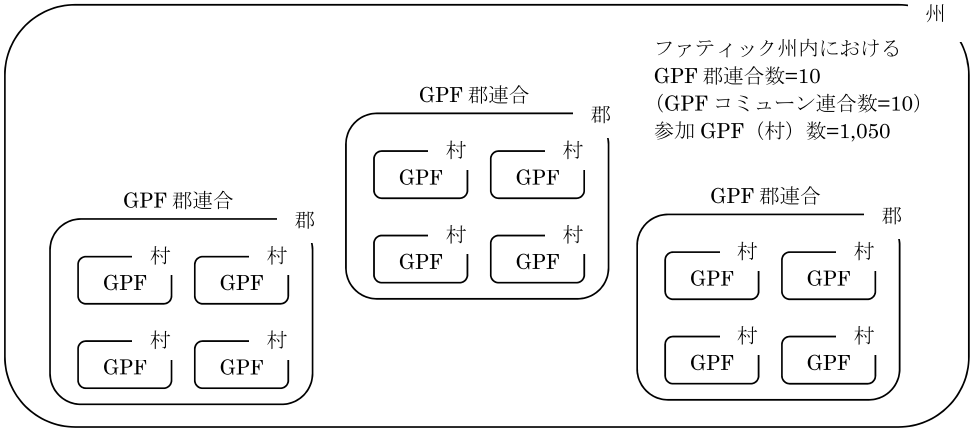
以上を踏まえて筆者は，アフリカ農村でのマイクロクレジット・プログラムにおける特質性や実践課題を検討するために，セネガル国ファティック州の PDIF（Programme de Développement Intégré de Fatick）と呼ばれる開発プログラムを事例に，現地調査及び分析を行ってきた(Ikemi, 2011)。PDIF は，SOS Faim（以下 SOSF）と呼ばれるベルギー国際 NGO からの資金援助を受けながら，セネガル人ローカルスタッフのみによって運営されている地域開発プログラムである。特に，出資者である SOSF が重視する主な 3 つの条件，(1)「農村女性」に開発の受益が行き届くようにする，(2)「女性グループ」，具体的には GPF (Groupement des Promotions Féminine) と呼ばれるセネガル既存の女性住民組織を活動の対象とする，(3)「マイクロクレジット活動」を支援の対象とする，がプログラムの基本方針とされ，堅実に遂行されていた点が特徴的であった。また，1999～ 2003 年をプログラムの調査･試験期間，2004～ 2007 年を実施期間，2008～ 2009 年をフォローアップ期間とされていた。

実施結果に関しては，参加者主体によるマイクロクレジット活動の運営管理と継続を実現させ，新たに連帯基金などのアイデアやイニシアティブも参加者側から生み出されるなど，一定の開発効果が評価された。筆者は Ikemi (2011) で，同プログラムの活動内容や，住民組織及び参加者の特徴等を分析した上で，取り組みが比較的上手くいったとされる要因を幾つか検討した。特に，初期条件として PDIF がターゲットとした女性グループ GPF がマイクロクレジット・プログラムに適していたこと，そして，支援者側の(やや一方的な)「開発の受け皿」選びが成功の鍵を握る可能性も否定できないこと等を指摘した(Ikemi, 2011: 23)。また，PDIF の同プログラムにおける資金の流れや，様々なアクターの位置づけ，役割，関わり等について，ファティック州全体におけるこれらの構造や仕組みのメカニズムを明らかにした(Ikemi, 2011: 20-21)。

しかしながら，PDIF の活動対象範囲はファティック州全域としているものの，実際にマイクロクレジット･プログラムの参加･融資対象となっていたのは，州内全ての GPF というわけではない。通常村単位(またはコミューン[4]内地区単位)で結成される GPF がさらに郡(またはコミューン)単位で集まった連合組織に参加することができる，選抜された GPF のみであった。また，「住民参加」や「住民主体」は確かに遂行されているとはいえ，PDIF のローカルスタッフや地元の行政機関等の助言や指導を受けながら，プログラム全体の運営管理を実際に担っていたのは，州内に複数存在する GPF 郡連合(及びコミューン連合)の代表者たちであった(GPF の組織構造に関しては図 1 を参照)。つまり，各住民組織のリーダーが集まり，役員会等を立ち上げて主導権を握り，資金や情報等に対するやや独占的な窓口となって活動が円滑に

4) コミューンとは，県庁所在地等の市街地を指す。なお，先述した通り PDIF は農村女性を主たる受益者とし，対象地域ファティック州は実際に首都圏等に対して農村地帯が広がる地方にあたるが，州全域を対象とした場合，農村だけでなくコミューンに在住する女性も活動の対象となっていることをここで断っておく。

図１　各行政レベル(村，郡，州)における GPF の組織図



出典)筆者作成。

進められていたというプログラム実践の全体像が，今や浮き彫りになっている。

しかし，このような州レベルからのアプローチに留まり，PDIF の活動報告書をはじめ，各 GPF 連合の代表者が集まる役員会での運営状況や決定事項の内容等を中心とした検証だけでは，分析対象とする住民組織の理解には未だ不十分である。例えば，同プログラムに参加する GPF 連合は，各地元でどのような組織活動としての特徴や実績を持ち，どのようにしてマイクロクレジット活動を遂行させているのかという詳しい現場の実態までは明らかにしていない。住民参加によるプログラムの全体像を把握しメカニズムを解明するだけでなく，参加の主体である住民組織の各農村での具体的な活動実態にまで踏み込んだ分析も，住民参加型開発の現場で起きている問題点や課題の発掘には必要不可欠と考える。

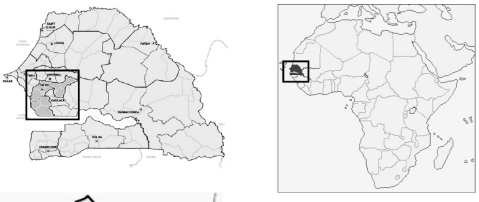
そこで本稿では，PDIF の対象でもあった UGPFO と呼ばれる住民組織を事例に，各村で組織された女性住民組織の連合体が郡レベルで結成された場合の組織活動としての特徴，及び地元での具体的な活動実態を明らかにする。本稿の意義は，現地で入手した過去 10 年の記録に関する一次資料を基に，住民組織活動の内容や特徴だけでなく，取り組みの変容や住民組織間の相違，また，これらの変容や相違をもたらす要因を，長期的かつ動態的な視点から検証することにある。そして，参加型開発及びマイクロクレジットに関する先行研究ではあまり強調されてこなかった,「成功要因」と表裏一体の「犠牲」や「副作用」の存在認識の重要性を指摘する。なお，本稿の内容は，2003 年 7 月～ 2005 年 7 月[5]，2007 年 2～ 3 月，及び 2009 年 11 月の計 3 回に亘り実施した現地調査に依拠する。

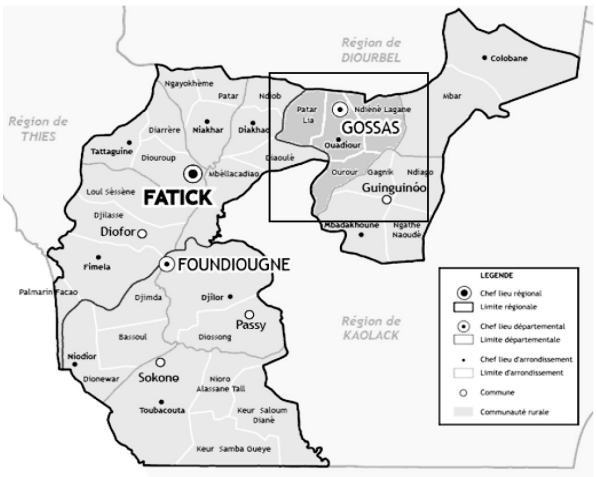
Ⅰ　UGPFO の概要

GPF ワジュール郡連合(Union des GPF de Ouadiour: UGPFO)は，ファティック州ゴサス県ワジュール郡(地図 1，地図 2)における各村の GPF が集まって結成された連合組織である。UGPFO は，PDIF のマイクロクレジット・プログラムの融資対象であった GPF 郡連合の一つに相当する(図 1 を参照)。同プログラムへの参加以外に UGPFO 自身がワジュール郡で取り

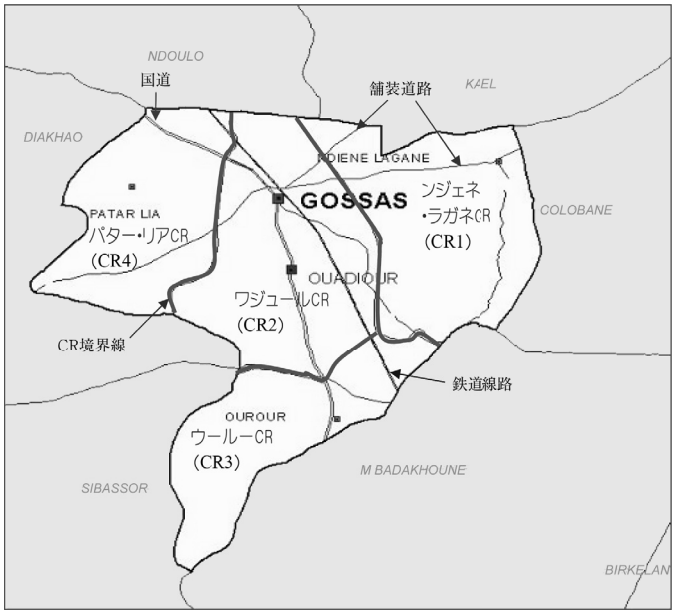
5) 筆者が国際協力事業団(現国際協力機構：JICA)の青年海外協力隊として同国に赴任していた時期である。

地図１　セネガル国ファティック州
（2007 年時点）





地図２　ワジュール郡（2007 年時点）



組んでいる活動内容としては，半年に一度マイクロクレジット集会を開き，そこで融資，返済，再融資を繰り返すというもので，農村女性であるメンバーたちの経済活動への資金補助を目的としている。集会に参加するのは各 GPF の代表者で，年に 2 回メンバー全員の返済金を持ち合わせて各村から集会所に集まってくる。集会中 GPF 名を呼ばれると代表者は前に出て，参

表１　UGPFO に参加している GPF の概要（2004 年時点）

No.	GPF 名（村名）	メンバー数	村落共同体（CR）	主な経済活動（融資金使途）
1	Bele 2	18	CR 1	小商い
2	Tewrou Ngary	51	CR 1	苗木，野菜栽培，小商い
3	Ndioufene	40	CR 1	ミル・落花生栽培
4	Daray Sidy	40	CR 1	落花生運搬，小商い
5	Korthiel	30	CR 1	収穫作業，小商い
6	Thiele Pathieme 1	64	CR 1	落花生運搬，収穫作業，小商い
7	Thiele Pathieme 2	118	CR 1	小商い
8	Tewrou Kossom	30	CR 1	収穫作業，小商い
9	Keur Massamba Ba	28	CR 1	ミル・落花生栽培
10	Dioudy Peulh	61	CR 1	ミル・落花生栽培
11	Dioudy Serere	50	CR 1	収穫作業，運搬，ミル・落花生栽培
12	Ndiene Lagane	140	CR 1	家畜，植林，小商い
13	Tawa	62	CR 2	収穫作業，小商い
14	Niomre	100	CR 2	収穫作業，小商い
15	Thienaba	93	CR 2	落花生・飼料運搬，小商い
16	Thiabe Wolof	40	CR 2	収穫作業，小商い
17	Barkael	103	CR 2	落花生運搬（手作業）
18	Loumbel Kelly	21	CR 2	小商い
19	Niangue	87	CR 2	小商い
20	Ouadiour	74	CR 2	苗木，家畜，植林，運搬作業，落花生油，小商い
21	Kothiao	61	CR 2	小商い，落花生運搬，収穫作業
22	Fass Kane	43	CR 3	ミル・落花生栽培，植林，小商い
23	Fass Koffe	92	CR 3	小商い
24	Ourour	82	CR 3	苗木，植林，小商い
25	Patar Lia	60	CR 4	小商い
26	Soumbel Keur Latyr	35	CR 4	家畜（羊），商店経営
27	Diambeye	35	CR 4	家畜（羊），商店経営
28	Patar Banane	100	CR 4	小商い
Total		1778		

※「小商い」とは，ここでは道端や週一定期市で，野菜，袋売りジュース，小物・アクセサリーなどを売る仕事をいい，「商店経営」とは，常設の露天商を指す。
出典）池見（2011）p.309 を若干修正。

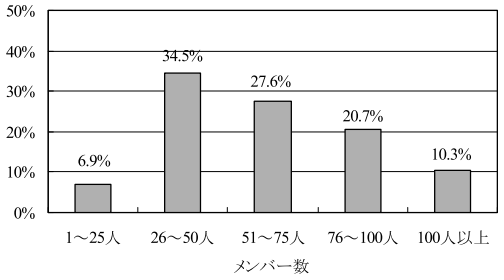
加者たちの前で持参したお金を役員に数えられ，確認が済むと記録帳に記載されて席に戻る，という流れで集会が進行する。また，この集会には地方行政機関である総合農村普及センター（Centre de l'Expansion Rurale Polyvalent: CERP）の所長（以下 CERP 所長）と生活改善指導員（monitrice）が，運営監督と記録補佐という形で参加している（筆者参与観察より）。

UGPFO の組織自体は 1987 年に創設されたが，このマイクロクレジット活動が始まったのは 1994 年のことで，開始当時の参加 GPF 数は 40（メンバー数は不明），活動資金は 50 万 CFA フラン[6]であった。それから 10 年が経つ 2004 年 6 月時点では，開始当時からの参加 GPF 数は 28 に減っている。しかしその後，新規に 6 の GPF が加わり，メンバー総数は 2007 年 7 月時点で 1,700 人以上，活動資金は総額 1,500 万 CFA フラン以上に拡大している（現地資料より）。

ファティック州の女性住民組織を対象とした

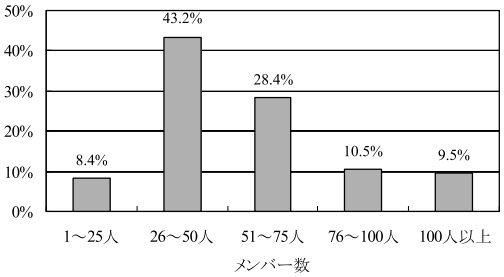
6）CFA（セーファー）フランはセネガルの通貨であり，西アフリカ，中部アフリカ地域の旧フランス植民地 14 か国で用いられている共同通貨である。2010 年 2 月現在，1 ユーロ =655.9CFA フランの固定レートで，1CFA ≒ 0.2 円。

図２-a　GPF の人数規模: UGPFO（ワジュール郡）



出典）筆者調査。

図２-b　GPF の人数規模: ファティック州



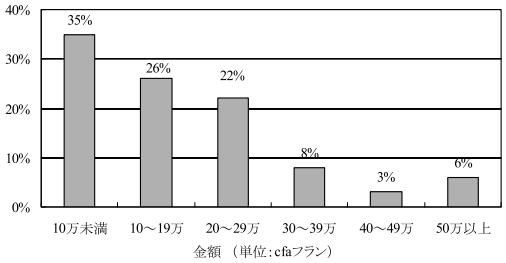
出典）Gning（2007）p. 7 “Figure no.10: Taille des groupements enquêtés”をもとに筆者作成。

先行研究に Gning（2007）がある。Gning は，農村女性の生計を支える住民組織の役割や経済活動に関する実態調査を行い，組織の規模や結成時期をはじめ，現存する女性住民組織の殆どはトンチン（tontine）[7]と呼ばれる伝統的な金融講組織が母体となっていること等を明らかにしている。また，自分たちが持つ資金力や技術，知識の範囲内で出来ることに取り組む傾向が強く，女性たちの経済活動の選択が比較的慎重で的確に行われていることも Gning は指摘している。

まず，UGPFO に参加する GPF のグループ

7）セネガルでトンチンの普及がいつ頃始まったかについては，トンチンという言葉自体は，17 世紀のフランス革命当時の経済学者トンティ（Lorenzo Tonti）が，フランスの財政再建のために提案した「トンチン年金」が語源の由来となっていることから，フランスによる西アフリカ植民地化が始まる 19 世紀初期頃と推測される。詳しくは野元（1996, 2004, 2005），小川（1998），Chidzero（1996）等を参照。

図３　GPF の自己資本規模: ファティック州



出典）Gning（2007）p. 9 “Figure no.11: Ressources financières des groupements enquêtés”をもとに筆者作成。

規模に関しては，筆者が 28 の参加 GPF のメンバー数を調べた結果（表１），最少で 18 人，最大で 140 人と大きな差が見られた。全体の傾向としては図２-a で示した通り，26～ 50 人規模のグループが最も多く，これよりもう少し大きい 51～ 75 人規模のグループが続いて多くなっている。Gning がワジュール郡を含むファティック州における 100 の GPF に対して行った調査結果（図２-b）と比較しても，この UGPFO つまりワジュール郡における GPF のグループ規模は，おおよそ同じ傾向であることが見て取れる。

一方，UGPFO に参加している GPF の自己資本規模に関しては，2006 年時点で平均約 43 万 CFA フランであった（筆者調査）。これとほぼ同時期に実施した Gning の調査結果と照合すると（図３），ファティック州全体としては 30 万 CFA フラン未満が 80％以上を占めている中で，比較的資本規模が大きい GPF という位置づけになる。しかし，これより 10 年以上前である 1994 年，つまり UGPFO のマイクロクレジット活動開始時点では平均 12.5 万 CFA フランであった（筆者調査）。

さらに Gning の調査によると，経済活動でまとまった現金を獲得した場合の使い道に関しては表２の通りである。やはり食料品を最優先に選ぶ女性が最も多く，投資や貯蓄に充てることを最優先に選ぶ者は比較的少ない。UGPFO の活動目的は本来，マイクロクレジット活動による資金獲得を通じて参加者たちの経

表２　経済活動でまとまった現金を獲得した場合の使い道トップ２

順位	最優先する使い道	割合
第１位	食料品	37%
第２位	衣類	21%
第３位	資金拡大(投資)	18%
第４位	貯蓄(家畜･家禽購入)	16%
第５位	子ども養育費	7%

順位	２番目に優先する使い道	割合
第１位	食料品	29%
第２位	医療品	24%
第３位	子ども養育費	18%
第４位	貯蓄(家畜･家禽購入)	15%
第５位	資金拡大(投資)	9%

出典)Gning(2007)pp. 10-11 をもとに筆者作成。

済活動の改善や向上を目指すというものであった。しかし，普段は満足に食べられない生活を送る低所得層の農村女性にとって，実際に現金収入を手にした際に先ず食料の獲得に向かうことは，当然避けられない行動原理といえる。特に，セネガル国民が大事にしている「テランガ(Teranga)」と呼ばれる伝統文化[8]の下では，先の見えにくい将来のこと(投資，貯蓄)よりも，目の前に確かに映る家族や親戚，友人に対して振る舞うことを優先する，女性たちの選択行為や価値意識も理解されよう。

Ⅱ　UGPFO の歴史

UGPFO は，現在に至るまで 20 年の歴史を持つ住民組織(連合)である。表３は現地資料と聞き取りを基に作成した UGPFO の歴史を示す略年表である。UGPFO 自体は 1987 年に設立し，その２年後に正式な住民組織として政府からの認定を受けた。したがって，UGPFO に参加している GPF は，少なくともそれ以前に各村で結成されていたことになる。また，1994 年には設立以来最初の組織再編成を実施し，同時に初のマイクロクレジット集会が開かれ，UGPFO の今日に至る具体的な取り組みの幕開けとなった。

UGPFO は，PDIF プログラムの実施期間中(2005 年)，SOSF から 1,000 万 CFA フランの融資供与を受けた実績がある。さらに表３を見ても分かる通り，同プログラムの試験期間中(2002 年)においても，UGPFO の中からワジュール(Ouadiour)GPF が融資対象として選ばれ，100 万 CFA フランの供与を受けている。CERP 所長からの聞き取りでは，「UGPFO の活動の歴史と実績が高く評価されたので，SOSF から融資を受けることができた」という(2005 年調査)。またローカルスタッフからの聞き取りでは，「CERP 所長の推薦も大きかった」という(2007 年調査)。そして，SOSF が実施するセミナーに参加したり融資を受けたりしたことが，参加者のモチベーションに繋がっていたと考えられる。実際に，当時の記録内容によると，集会欠席者や未返済グループが減っていたことが確認された(記録帳に関しては次節で詳述)。

さらに UGPFO がこれまでに受けた外部支援としては，当時ワジュール郡で村落開発業務に携わっていた日本の JICA ボランティア(筆者: 以下支援者)による「マイクロクレジット手帳」の配布が挙げられる。2005 年１月時点まで，UGPFO のマイクロクレジット活動に関する記録の全ては，CERP 所長が保管する一冊の集会記録帳のみであった。そこで，各 GPF の代表者であり，メンバーから集めた資金の管理責任を担う集会参加者にも，必要最低限の融資・返済活動に関する内容や証拠を，記憶だけでなく記録としても客観的に確認出来るようにする目的で，マイクロクレジット手帳の作成・導入が実施された。手帳の中身はフランス語とウォロフ語で書かれており，識字能力の低い農村女性

8)「テランガ」とはセネガル独自の文化・価値観である。「親切にもてなす」「家族のように歓迎する」という意味があり，セネガル人はこのテランガを誇りにし，大切にしている。

表3　UGPFO の歴史

1987 年 ･･･ UGPFO 設立　← GPF 全国連盟設立の翌年
1989 年 ･･･ 公式認定
1994 年 ･･･ 1 度目の組織再編成を実施
　　最初のマイクロクレジット集会の開催*
1999 年 ･･･ 2 度目の組織再編成を実施　← PDIF 調査･試験期間開始
2000 年 ･･･ SOSF によるセミナーに参加
2002 年 ･･･ SOSF から 100 万 CFA の融資供与　← Ouadiour GPF が代表受取
2004 年 ･･･ SOSF によるセミナーに参加　← PDIF プログラム実施期間開始
2005 年 ･･･ SOSF から 1,000 万 CFA の融資供与　← PDIF 仲介

* 開始当時はマイクロクレジット（micro crédit）とは呼ばず，リボルビングクレジット（crédit revolving）と呼ばれていた。

出典）現地資料“Document de la Réunion de Micro-crédit, l' Union des GPF de Ouadiour”及び筆者調査より作成。

にも使い易いシンプルな内容で，集会出席を示す参加者自身のサインと，毎回の返済・融資金額，次回の集会日，次回の返済金額等の数字を記入する欄が設けられている。手帳導入の当初は，まず支援者が CERP 所長と UGPFO の役員に対して使い方の指導を行った後，今度は彼（彼女）らが他の参加者に対して指導を行うことで，難なく直ちに使用が開始された。また，参加者は識字能力の低い農村女性が大多数であるため，各記入は通常 CERP 所長が代行し，サインのみ本人が行うという方法が採られていた。

マイクロクレジット手帳の使用は定着し，支援者が任期満了（2005 年 7 月）で現場を去ってから約 1 年半後においても，この手帳の活用は継続され有効に機能していることが，CERP 所長を含む参加者の聞き取りから確認された（2007 年調査）。それからさらに約 2 年半後においても，CERP 所長の死去後ではあったが，参加者への自宅訪問による聞き取りと彼女たちが所持している手帳の記載内容などから，マイクロクレジット手帳の活用が依然として続けられていることが確認された（2009 年調査）。

このように，UGPFO は，長年活動を続けていく中で，外部支援を受ける機会を時折獲得してはこれを着実に有効利用し，資金の拡大や組織活動の改善を図ってきた住民組織であるといえる。

Ⅲ　UGPFO のマイクロクレジット活動の変遷

『Document de la Réunion de Micro-crédit, l' Union des GPF de Ouadiour』と手書きで表紙に書かれているハードカバーの記録帳には，1999 年 2 度目の組織再編成時（表 3）に行われたマイクロクレジット集会を第 1 回とし，現在までに至るまでの集会実施内容が記されている。そこで，初回から 2009 年 2 月 21 日実施の第 20 回までの記録内容を分析した。表 4 は，UGPFO のマイクロクレジット集会第 1 回目（1999 年）から第 19 回目（2008 年 7 月）までの全参加 GPF の登録･返済状況を表したものである。第 7 回及び第 20 回集会に関しては，記録内容が大幅に不十分あるいは未記載のため省略した。また，基本的に返済額は前回融資額に利子 10％を上乗せした金額となるが，これよりも少ない金額の記載が散見される。この場合，該当する GPF は，返済金を全額払えなかったとして罰金 5,000CFA フランが課されていることになる。さらに「未返済」は，集会欠席を意味する場合が殆どである。

10 年に亘るこの記録内容を追っていくと，まずスタートとなる第 1 回を基準とした場合，第 2 回以降から早々と集会欠席者や未返済グループが目立ち始めている。また，参加登録 GPF の数も，初回から第 6 回までは 34 から徐々に 39 へと一時的に増えていたが，第 8 回には登録 GPF 数が 28 となり，開始当初からは 6,

最多の時期からは11も減少した。しかし，この第8回集会は，初回以来の空欄のない記録内容となっており，また登録GPFはこの回から定着しており，『参加グループ(GPF)名』列に書かれる名前の順番も固定されるようになった。さらに，この回以降返済率において改善が見られ，記録帳においても新たな記載項目の追加や，欄外を使って諸経費や罰金支払状況を明記するなど，記録内容の透明化や充実化が成されてきたことも読み取れた(記録帳原本より)。**表4**を見ても，第8回以降少なくとも第12回(2005年1月)までは良好な時期が続いていたことが分かる。

このような改善の変化が現れた背景には，第8回集会の実施日は2002年10月であり，SOSFから初めての融資供与を受けた年に当たる(**表3**)。したがって，この時期においても未返済や未参加グループの登録解除，つまり事実上3度目の組織再編成が実施されたとみられる。SOSFに対する高い評価の獲得と，融資先としての信頼度をアピールする狙いも込めて，組織全体としてのメンバー参加率や返済率の高さ，安定度を保持し，組織の質的改善を短期的に図ったことが推測される。また，第8回集会前後の時期は，マイクロクレジット手帳の普及時期とは重なっていないが，同手帳を作成した支援者がUGPFOの活動に(間接的ではあるが)関与していた時期(2003～2005年)と若干重なっており，このことも少なからず効果をもたらしていた可能性はあり得る。

UGPFOにおける参加グループ(GPF)数は縮小しているが，一方で組織力としての評価は高いという点は注目すべきである。例えば重富によると，住民組織において人びとの長期的な結合を維持している要素は，組織として保有された資源(ここではグループ基金)であり，この資源の存在によって人びとが組織内に自らを留めようとする原理が働く。しかし，この資源を維持するためにまず必要なのは，組織構成員全てが集団的合意に従うことであり，最終的には構成員が組織目標に対して貢献しようとする意識を持つか否かが重要となる(重富，1995: 19)[9]。以上の見解に従えば，UGPFOは，長年の活動過程でドロップアウトするGPFを多数放出させながらも，組織で決められた目標や守るべきルールに従う努力を行う，活動に積極的で継続参加の意欲を持つGPFだけが残り，結束力や運営能力といった組織の質的向上がなされてきたといえる。

なお，**表4**中のCRとは，**表1**でも記した通り村落共同体(Communauté Rurale)を指し，各GPFが存在する村がどの村落共同体に属しているかを表している。ワジュール郡は4つの村落共同体に行政区分されており，郡内計118の村がそれぞれの共同体に位置付けられている。しかし，地域住民のアイデンティティ（居住地，出身地，参加している組織活動地域等に対する住民意識)に関しては，村よりもCR名で表したりCRで認識されていることが確認された(現地調査より)。そこで筆者は，住民意識との関係性がみられるCRという地域区分を用い，住民の生活と直接関係性をもつ地域経済社会の特徴について，住民からの聞き取り結果に基づくランキング(経済･生活水準が高いと思われる地域から順にCR1, CR2, CR3, CR4と表記，地理的位置は**地図2**を参照)を用い，CR比較による分析を行ってきた(池見，2011)。今回の分析でも同ランキングを取り入れて，各GPFの集会参加状況をCRと照合してみると(**表1**，**表4**)，ランキングで評価の高いCR1，CR2に属するGPFは，他のCRに属するGPFよりも，参加数が多く返済率も比較的高いことが見て取れる。また，第8回集会の前まででドロップアウトしたGPFのCRも調べた結果(**表4**)，ラ

9) さらに重富は，住民が自分たちで問題を解決しているという意識をもち，実際にその能力を形成，蓄積することができるという主体性の形成が，住民組織における組織メカニズムの内在化がもたらす効果の一つであると指摘する(重富，2003: 231)。

表4　過去20回(1999年～2009年，ただし第7回，第20回を除く)に亘る

No.	参加GPF名	所属CR	第1回(1999/n.d.)	第2回(2000/1/14)	第3回(2000/7/14)	第4回(2001/1/19)	第5回(2001/7/20)	第6回(2002/1/25)	第8回(2002/10/25)	第9回(2003/4/2)
1	Bele 2	CR1	68,000	74,800	80,300	89,100	108,350	未返済	136,690	未返済
2	Tewrou Ngary	CR1	68,000	74,800	80,300	89,100	108,350	119,200	136,690	293,350
3	Ndioufene	CR1	68,000	未返済	80,300	55,100	108,350	119,200	136,690	293,350
4	Daray Sidy	CR1	68,000	74,800	80,300	未返済	102,000	119,200	136,690	293,350
5	Korthiel	CR1	68,000	74,800	80,300	89,100	108,350	119,200	136,690	293,350
6	Thiele Pathieme 1	CR1	68,000	74,800	80,300	89,100	108,350	119,200	136,690	293,350
7	Thiele Pathieme 2	CR1	68,000	74,800	80,300	89,100	108,350	119,200	136,690	293,350
8	Tewrou Kossom	CR1	68,000	74,800	80,300	89,100	108,350	119,200	136,690	293,350
9	Keur Massamba Ba	CR1	68,000	未返済	80,300	未返済	未返済	未返済	136,690	未返済
10	Dioudy Peulh	CR1	68,000	74,800	80,300	89,100	108,350	119,200	136,690	293,350
11	Dioudy Serere	CR1	68,000	74,800	80,300	89,100	108,350	119,200	136,690	293,350
12	Ndiene Lagane	CR1	68,000	74,800	80,300	89,100	108,350	119,200	136,690	293,350
13	Tawa	CR2	68,000	74,800	80,300	89,100	108,350	119,200	136,690	293,350
14	Niomre	CR2	68,000	74,800	80,300	89,100	108,350	119,200	136,690	293,350
15	Thienaba	CR2	68,000	未返済	80,300	89,100	100,000	119,200	136,690	293,350
16	Thiabe Wolof	CR2	68,000	未返済	80,300	89,100	108,350	119,200	136,690	293,350
17	Barkael	CR2	×	未返済	未返済	44,100	100,000	未返済	136,690	293,350
18	Loumbel Kelly	CR2	×	×	×	×	108,350	未返済	136,690	293,350
19	Niangue	CR2	68,000	74,800	80,300	未返済	未返済	119,200	136,690	293,350
20	Ouadiour	CR2	68,000	74,800	80,300	89,100	108,350	119,200	136,690	293,350
21	Kothiao	CR2	68,000	74,800	80,300	89,100	108,350	119,200	136,690	293,350
22	Fass Kane	CR3	68,000	74,800	80,300	89,100	108,350	119,200	136,690	293,350
23	Fass Koffe	CR3	68,000	74,800	80,300	89,100	108,350	119,200	136,690	293,350
24	Ourour	CR3	68,000	74,800	80,300	未返済	63,000	119,200	136,690	293,350
25	Patar Lia	CR4	68,000	未返済	80,300	未返済	未返済	119,200	136,690	287,000
26	Soumbel Keur Latyr	CR4	68,000	未返済	80,300	未返済	100,000	105,000	136,690	293,350
27	Diambeye	CR4	68,000	74,800	80,300	未返済	108,350	119,200	136,690	285,350
28	Patar Banane	CR4	68,000	未返済	80,300	未返済	99,000	119,200	136,690	293,350
29	Thiabe Diene	CR2	×	×	×	×	×	×	×	×
30	Gneb n'guel	n.d.	×	×	×	×	×	×	×	×
31	Teurou Ndongene	CR1	×	×	×	×	×	×	×	×
32	Inna K Galo	n.d.	×	×	×	×	×	×	×	×
33	Teurou Mbaye	CR2	×	×	×	×	×	×	×	×
34	Thieky Serere	n.d.	×	×	×	×	×	×	×	×
35	Ndiebel	CR4	68,000	未返済	80,300	未返済	未返済	未返済	×	×
36	Gapsel	CR4	68,000	74,800	未返済	未返済	未返済	未返済	×	×
37	Keur Ndiouga	CR4	68,000	未返済	未返済	未返済	未返済	未返済	×	×
38	Keur Amadou Diop	CR4	68,000	未返済	未返済	未返済	未返済	未返済	×	×
39	Londior	CR4	68,000	未返済	未返済	未返済	未返済	未返済	×	×
40	Gowethie	CR3	68,000	未返済	未返済	89,100	98,010	未返済	×	×
41	Darou Gueye	CR2	68,000	未返済	未返済	未返済	未返済	未返済	×	×
42	Doyoli	CR2	68,000	未返済	未返済	89,100	未返済	未返済	×	×
43	Thiacalar	CR3	×	74,800	未返済	未返済	50,000	未返済	×	×
44	Keur Khaly	CR2	×	未返済	未返済	未返済	未返済	未返済	×	×
45	Colobane Soumbel	CR3	×	×	未返済	未返済	未返済	未返済	×	×
TOTAL			2,312,000	1,570,800	2,168,100	1,792,100	2,770,660	2,846,600	3,827,320	7,612,750
参加登録GPF数			34	37	38	38	39	39	28	28
完全返済した場合の総額			2,312,000	2,767,600	3,051,400	3,385,800	4,225,650	4,648,800	3,827,320	8,213,800
返済率			100%	57%	71%	53%	66%	61%	100%	93%

出典)筆者作成。

ンキングで評価の低いCR3やCR4に属する村のGPFが比較的多くなっていることも分かるだろう。

さらに，集会の活動状況における問題点として挙げられる特徴が，記録内容から2点程指摘される。まず1点目は，第12回以降で新規参加を果たしたグループの集会出席・返済状況があまりよくないということである。10年以上前から共に活動している28の既存グループの輪の中に途中で加わるのは，それほど容易なことではなかったという推測も出来るだろう。「既存グループ側が歓迎しない」という要素は現場

UGPFO マイクロクレジット集会における参加 GPF の登録・返済状況

第 10 回 (2004/1/15)	第 11 回 (2004/6/15)	第 12 回 (2005/1/17)	第 13 回 (2005/7/18)	第 14 回 (2006/1/23)	第 15 回 (2006/7/24)	第 16 回 (2007/1/22)	第 17 回 (2007/7/23)	第 18 回 (2008/1/21)	第 19 回 (2008/7/21)	区分
322,685	355,000	未返済	429,550	未返済	519,755	571,735	628,910	未返済	未返済	初回から継続している返済額で登録が定着している 28GPF
227,000	未返済	390,500	429,550	472,505	未返済	未返済	未返済	691,801	760,985	
322,685	355,000	390,500	429,550	472,505	未返済	571,735	628,910	691,801	760,985	
322,685	355,000	390,500	429,550	472,505	519,755	571,735	未返済	691,801	760,985	
322,685	355,000	390,500	429,550	472,505	519,755	571,735	628,910	691,801	760,985	
322,685	355,000	390,500	429,550	472,505	519,755	571,735	628,910	691,801	760,985	
322,685	355,000	390,500	429,550	472,505	519,755	571,735	628,910	691,801	760,985	
322,685	355,000	390,500	429,550	472,505	519,755	571,735	628,910	691,801	760,985	
322,685	355,000	390,500	429,550	472,505	519,755	571,735	628,910	691,801	760,985	
322,685	355,000	390,500	429,550	472,505	519,755	571,735	628,910	691,801	760,985	
322,685	355,000	390,500	429,550	472,505	519,755	571,735	628,910	691,801	760,985	
322,685	355,000	390,500	429,550	472,505	519,755	571,735	628,910	691,801	760,985	
322,685	355,000	390,500	429,550	472,505	519,755	571,735	628,910	691,801	760,985	
322,685	355,000	390,500	429,550	472,505	519,755	571,735	628,910	691,801	760,985	
322,685	355,000	390,500	429,550	472,505	519,755	571,735	628,910	691,801	760,985	
302,685	355,000	390,500	429,550	472,505	519,755	571,735	628,910	691,801	760,985	
未返済	355,000	390,500	未返済	未返済	519,755	未返済	628,910	691,801	760,985	
322,685	355,000	390,500	429,550	472,505	519,755	571,735	628,910	691,801	760,985	
322,685	355,000	390,500	429,550	472,505	519,755	571,735	628,910	691,801	760,985	
322,685	355,000	390,500	429,550	472,505	519,755	571,735	628,910	691,801	760,985	
322,685	355,000	390,500	429,550	472,505	未返済	571,735	628,910	691,801	未返済	
322,685	355,000	390,500	429,550	472,505	未返済	571,735	628,910	691,801	未返済	
322,685	355,000	390,500	未返済	472,505	未返済	571,735	未返済	未返済	未返済	
250,000	355,000	390,500	未返済	未返済	519,755	未返済	628,910	691,801	未返済	
322,685	355,000	390,500	429,550	未返済	519,755	571,735	628,910	691,801	未返済	
322,685	355,000	390,500	未返済	未返済	519,755	未返済	628,910	未返済	未返済	
322,685	355,000	390,500	429,550	未返済	519,755	571,735	628,910	691,801	未返済	
×	×	55,000	未返済	未返済	未返済	未返済	×	×	×	第 12 回 (2005 年)以降新規登録した GPF
×	×	55,000	60,500	66,550	73,205	80,530	88,585	97,445	未返済	
×	×	55,000	60,500	未返済	未返済	未返済	未返済	未返済	未返済	
×	×	55,000	未返済	66,550	未返済	73,205	未返済	未返済	×	
×	×	×	×	×	×	55,000	60,500	未返済	66,550	
×	×	×	×	×	×	×	55,000	未返済	66,550	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	過去(第 6 回: 2002 年まで)登録していた GPF
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
8,524,125	9,585,000	10,763,500	10,000,650	10,528,210	11,507,815	13,930,375	15,926,835	17,392,470	13,830,830	
28	28	32	32	32	32	33	33	33	32	
9,035,180	9,940,000	11,154,000	12,269,400	13,496,340	14,845,960	16,385,700	17,990,735	19,856,363	21,655,060	
94%	96%	96%	82%	78%	78%	85%	89%	88%	64%	

からは殆ど観測されなかったので，新規グループ側のマイクロクレジット活動の不慣れさやモチベーションの違い，仲間に入ることへの躊躇等が可能性として考えられる。2 点目は，参加グループが定着した第 8 回以降これまで少なかった既存グループの集会欠席が，第 19 回(2008 年 7 月)で目立つことと，次の第 20 回(2009 年 2 月)では記録自体が全く行われていなかった点を指摘しておかねばなるまい。これらの原因は，CERP 所長の死去(2008 年 4 月)後に実施された集会であるということが大きな要因の一つと考えられる。

Ⅳ　まとめと考察

以上，UGPFO の活動の歴史や 10 年に亘る集会記録を中心に議論してきたが，この女性住民組織は，CERP 所長の先導の下，マイクロクレジット活動での集会参加率や返済率において低下と向上を繰り返す動態的なプロセスを経ながら，活動記録の充実化や手帳導入等，組織運営の改善も図られていることが明らかとなった。実際に UGPFO は，地域の農村女性が主体となって取り組まれている住民組織として認められ，その活動の歴史や実績に対しても高い評価を獲得している。またこれを受けて，国際 NGO 等からの融資供与やプロジェクト介入なども実際に行われていることが確認された。このように UGPFO は，時折受ける外部支援を有効に活用しながら住民主体の参加を基盤に取り組みを維持し，活動資金も着実に拡大させてきた，ワジュール郡を代表する女性住民組織ということができる。

しかし UGPFO は，CERP 所長の死去後，参加者の集会出席や返済の状況が悪化している傾向も見られ，今後の取り組みにおいてまた新たな動きが起こる可能性も暗示された。さらに，長期的な活動過程において，ドロップアウトを放出しながら取り組みに意欲的な参加者だけが残ることによって，組織力の質的な向上を成し遂げてきたという解釈も指摘された。

そこで，UGPFO の組織発展要因に関する含意を得ようとするならば，重要なのは何がドロップアウトするグループと残存するグループを分けたのか，グループ間のモチベーションの違いはどこから生まれたのか，という点にある。この点に関して，第一に，GPF が属する CR という地域区分の違いによる影響である。これは前節(表 4)でも指摘した通り，比較的経済・生活水準が低いとされる CR3，CR4 に属する GPF のドロップアウト率が高いことや，逆に同水準が高いとされる CR1，CR2 に属する GPF が UGPFO に参加している全 GPF 数の 3 分の 2 以上を占めている(表 1，2004 年時点)ことからも考察される。第二に，各グループの代表者におけるリーダーシップ発揮の強弱が示唆される。代表者は，通常各グループ内あるいは村内で信望の厚い人が選出される。だがこれに留まらず，グループや村を超えた CR や郡全体に影響力を誇るバイタリティや人脈を持ち，他の代表者たちや CERP 所長との意見交換，共同プロジェクト等にも積極的に参加する女性がいる GPF が，比較的モチベーションが高い傾向が見られた(参与観察より)。しかし，以上から見えてくることは，CR3 や CR4 に属する村々のように，経済・生活水準の低い村を切り捨てることによって何とか活動を存続させてきた，いわゆる弱者切り捨てという UGPFO が持つ別の顔，負の側面の存在である。

住民組織活動を成功に導いた積極的要因の背後には，犠牲や副作用が同時に発生している事実や可能性を軽視してはならず，この問題点の十分な認識と理解があらためて必要だと考える。また，これらの犠牲や副作用と向き合い，打開策に向けて住民と共に話し合い検討していく姿勢でこそ，参加型開発及びマイクロクレジットの実施効果としての成功要因を語ることができるのではないだろうか。例えば，UGPFO を高く評価して融資や活動支援を行ってきた SOSF や PDIF，CERP 所長は，報告書や聞き取りの中でこの問題に関する言及は一切なされていなかった。その教訓の一つとして，まず支援する側は，開発の表舞台から外れた，つまり，プロジェクトや組織活動への参加から排除されている，または退出する住民に対する配慮も当然重要であることを認識しなくてはならない。先述した通り筆者は別稿で，支援者側が対象者を選ぶことで，マイクロクレジット活動を含む開発プログラムの実践をより円滑かつ成功裡に進めて行くことができる可能性も否定できないことを指摘した。しかし同時に，参加(したくても)できない住民，あるいは参加しない(自ら不参加を選択する)住民を無視することになっ

てはならず，このような住民を対象にさらに詳しい分析や検証も必要であると考える。そして，これまでの研究成果に組み込み再検討を試みることは，参加型開発における実践課題に実務的かつ学術的に取り組む上でも有益であり，筆者の今後の課題である。

謝辞

本稿の作成にあたっては，北海道大学大学院経済学研究科の宮本謙介教授よりご指導とご助言を賜った。筆者の研究生活そのものにおきましても，終始懇切なるご教示とご鞭撻を与え続けて下さった。この場をお借りして，深い感謝の意を表したい。

また，査読者より有益かつ的確なコメントをいただいた。出来る限り本稿に反映させたが，未だ不十分な点については今後の課題とさせて頂きたい。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

Armendáriz, Beatriz and Morduch, Jonathan（2005）*The Economics of Microfinance*, London: The MIT Press.

浅野史代(2008)「『エンパワーメント』の問題点に関する一考察－ブルキナファソ農村における女性グループの活動推移を事例として」『アフリカ研究』73: 17-29。

粟野晴子(2000)「アフリカの農村小口金融における課題と取組み－ジンバブエの貯蓄クラブを事例として」『アフリカレポート』31: 33-36。

————(2002)「小口金融活動から住民参加による地域開発へ－ジンバブエにみるその可能性と限界」斉藤文彦(編)『参加型開発－貧しい人々が主役となる開発へ向けて』日本評論社 , pp. 107-134。

Chambers, Robert（1983）*Rural Development: Putting the Last First*, Essex: Pearson Education Limited.（チェンバース，ロバート(1995)『第三世界の農村開発－貧困の解決－私たちにできること』稲穂智夫・甲斐田万智子(監訳)，明石書店）

————（1997）*Whose Reality Counts?: Putting the First Last*, London: Intermediate Technology Publications.（————(2000)『参加型開発と国際協力－変わるのはわたしたち』野田直人・白鳥清志(監訳)，明石書店）

Chidzero, Anne-Marie（1996）"Senegal" in Leila Webster and Peter Fidler（eds.）, *The Informal Sector and Microfinance Institutions in West Africa*, Washington D.C.: World Bank, pp. 195-202.

Gning, Malick（2007）*Etude diagnostic des organisations féminines de la région de Fatick pour l'utilisation d'un fonds de solidarité*, Dakar: Groupe d'Etude de Recherche et d'Aide à la Décision（GERAD）.

Hickey, Samuel and Mohan, Giles（eds.）（2004）*Participation: From Tyranny to Transformation? Exploring New Approaches to Participation in Development*, London and New York: Zed Books.（ヒッキィ, サミュエル・モハン, ジャイルズ(編)（2008）『変容する参加型開発－「専制」を超えて』真崎克彦(監訳)，明石書店）

Ikemi, Mayu（2011）"A Challenge of Microcredit Program in Rural Africa: A Case Study of Fatick Integrated Development Program in Senegal" *Economic Journal of Hokkaido University*, 40: 15-28.

池見真由(2011)「アフリカ農村における地域経済社会と住民組織活動の関係性－セネガルの村落共同体を事例とする住民の意識・評価との比較分析」『経済社会学会年報』33: 302-313。

真崎克彦(2010)『支援・発想転換・NGO －国際協力の「裏舞台」から』新評論。

野元美佐(1996)「カメルーンの頼母子講組織－ヤウンデにおけるバミレケの場合」『アジア・アフリカ言語文化研究』51: 105-130。

————(2004)「貨幣の意味を変える方法－カメルーン，バミレケのトンチン(頼母子講)に関する考察」『文化人類学』69(3): 353-372。

————(2005)『アフリカ都市の民族誌－カメルーンの「商人」バミレケのカネと故郷』明石書店。

小川了(1998)『可能性としての国家誌－現代アフリカ国家の人と宗教』世界思想社。

岡本真理子・粟野晴子・吉田秀美(編)（1999）『マイ

クロファイナンス読本』明石書店。

Rahman, Aminur (1999) "Micro-credit Initiatives for Equitable and Sustainable Development: Who Pays?" *World Development*, 27(1): 67-82.

坂井真紀子(2005)「チャド南部における農民と金銭の関係」『アフリカレポート』41: 43-48。

佐藤寛(編) (2003)『参加型開発の再検討』アジア経済研究所。

重富真一(1995)「参加型農村開発の組織論－東北タイ農村における住民組織の形成過程」『アジア経済』36(2): 2-24。

――――(2003)「地域社会の組織力と地方行政体－東南アジア農村における小規模金融組織の形成過程を比較して」『アジア経済』44(5･6): 214-235。

鷹木恵子(2005)「マグリブ三国におけるマイクロクレジット普及の背景とその現状－『開発とジェンダー』の考察に向けて」加藤博(編)『イスラームの性と文化』東京大学出版会, pp. 67-100。

――――(2007)『マイクロクレジットの文化人類学－中東・北アフリカにおける金融の民主化にむけて』世界思想社。

Yunus, Muhammad (1999) *Banker to the Poor: Micro-lending and the Battle against World Poverty*, New York: PublicAffairs.